

平成 28 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

Challenge, Change, Smile! (自らの力を高め、視野を広げるために何事にもチャレンジし、自分自身の可能性を引き出し、高め、自己変革をめざす、そして笑顔が絶えない) を合言葉に生徒が来たいと思う学校、来て良かったと思える学校をめざす。そのために

- 1 生徒に「学ぶ楽しさ、わかる喜び」を実感させ、学力の向上に取り組む。
- 2 生徒が社会の一員としての自覚と規範意識を持ち、責任ある行動をとることができるよう生徒指導を充実させる。
- 3 生徒が学習活動・学校行事、部活動等に積極的に参加するとともに主体的に進路を選択し、豊かな自己実現を図れるよう支援する。
- 4 生徒が自らを律し他者を尊重し、思いやる心を持ち、人権や生命を尊重する精神を育む教育に取り組む。

2 中期的目標

1 確かな学力の育成

- (1) 高大接続改革実行プランや新しい学習指導要領を踏まえ、「学ぶ楽しさ、わかる喜び」を実感させる授業改善（主体的・協働的な学び）の推進と教員の資質向上に取り組む。
 - ア 授業力向上 PT を中心に、公開授業や研究授業、授業アンケートを効果的に活用した授業改善に組織的に取り組む。
 - イ ICT を活用した授業改善やアクティブラーニング（AL）について研修・研究をすすめる。
 - ウ ベル始めを徹底し全教員が 45 分を有効に使った授業を展開する
 - エ 教科会議を充実し、各教科で 3 年間を見通した指導内容や指導方法、評価の見直しを図る。
 - オ 学習の習慣を身につけさせるための取組みを検討・試行・実施する。

* 学校教育自己診断（生徒）「授業は分かりやすい」（H27：46.7%）を 3 年後には 65%にする。

- (2) 国語力、英語力の向上とともにプレゼンテーション能力を育成する。

- ア 英語検定、漢字検定、その他の資格検定の広報を充実し受験者の増加及び合格率の向上に取り組む。
- イ 生徒の主体的・協働的な学びを通して発表の機会を多くするなど、全ての授業で言語活動を重視した取組みを推進する。

* 検定の受験者数を 10%ずつ増加させ 3 年後には 30%増をめざす。合格率を 5 P ずつ向上させ 3 年後には 15 P 増をめざす。

* 学校教育自己診断（生徒）「授業で自分の考えをまとめたり発表する機会がある」（H27：55.7%）を 3 年後には 70%にする。

2 豊かな自己実現の支援・夢や目標を持った生徒の育成

- (1) 志学、キャリア教育、人権教育等について、「総合的な学習の時間」と LHR をさらに有機的に連携させ統合的な指導計画を確立する。

- ア 学年毎の計画から、3 年間を見通した計画への改善に取り組み、平成 30 年度に計画を完成する。

* 学校教育自己診断（教員）「各分掌や学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」（H27：51.8%）を 3 年後に 80%に近づける。

- (2) 進路指導の充実を図る。

- ア クラス編成を工夫すると共に進学希望者に対する講習会を計画的、継続的に実施するシステムを確立し、目標の大学や専門学校への進学決定率を高める。

- イ 就職希望者に対しては、面接指導と共にマナー・服装・態度・言葉遣いについての指導を強化し希望先への内定率 100%をめざす。

- ウ 新しい大学入試制度への転換に対応するためカリキュラムの見直しに着手する。

* 関西の中堅私立大学への現役合格者数（H27：45名）を 3 年間で 50%増加させる。 希望先就職内定率 100%

- (3) ルール・マナー遵守と規範意識の涵養

安全で安心、且つ気持ちの良い学校生活を送るために、お互いが進んで挨拶を行うと共にルールやマナーを遵守できる生徒を育成する。そのために「厳しさと優しさ」を基本理念に全教職員が一致して生徒指導に取り組む。

- ア あいさつ運動に教職員全員で取り組む。

- イ 服装・頭髪・装飾品等の指導強化に取り組む。

- ウ 遅刻者数の減少に取り組む。

- エ 学校生活や授業規律について、全教員が一致して生徒に守らせるべき最低限のルールを徹底し、組織的・統一的な指導を行う。

* 学校教育自己診断（保護者「生徒指導の方針に共感できる」生徒「先生は協力して生徒指導にあたっている」）（H27：67.3%、53.7%）を 3 年間で 75%にする。

* 遅刻者数（H25：14000 ⇒ H26：8300 ⇒ H27：6300）を 3 年間で半減させる。

- (4) 生徒の自主活動の育成・活性化

- ア 学校の教育活動における様々な機会を通じて部活動の魅力や意義を伝えることに努め、部活動加入者を増加させる。

- イ 部活動だけでなく生徒を学校に定着（放課後等に活動）させる取組みを企画し集団や学校への帰属意識を高める。

- ウ 3 年間を見通した学校行事の在り方を検討し、平成 30 年度までに行事計画を再構築する。

- エ 生徒自治会を中心として生徒のリーダー育成に取り組む

* 部活動加入率（H27：55%）を 3 年間で 65%にする。

* 学校教育自己診断（生徒）「港高校で充実した高校生活を送っている」（H27:66.7%）を 3 年間で 75%にする。

- (5) 課題や悩み・障がいのある生徒への支援・教育相談の充実を図る。

- ア 保護者や関係機関との連携を強化するとともに校内の教育相談体制を充実し、必要な生徒に適切な支援・指導を行うことができる体制を確立する。

* 学校教育自己診断（保護者「子どもの心身のことや悩みについて気軽に相談できる」・生徒「担任以外に気軽に相談できる先生がいる」）（H27：55.0%、41.5%）を 3 年間で 65%以上にする

3 学校運営体制の強化・改善

- (1) 「コア会議」（校長、教頭、首席、指導教諭、学年主任）が発案し、運営委員会が企画検討の中心となって学校経営戦略の具体化を推進する。

- ア 学年が担任だけでなく副担任を含めた組織として機能するように、また各分掌が学校経営計画に則り学校教育自己診断の意見も参考としながらリーダーシップを発揮できるように組織体制を強化・改善する。

- イ 学年の独自性は尊重しながらも継続性・連続性のある 3 ヶ年計画を作成する。

- ウ 会議での情報発信や議論の場の創設により教員一人ひとりが学校経営に参画しているという自覚を高める。

* 学校教育自己診断（教員）「学校運営に教職員の意見は反映されている」（H27:48.3%）を 3 年間で 65%とする。

- (2) 教員力向上

- ア 研修等の機会を充実すると共に中堅・ベテラン教員が初任者及び若手教員の育成を担当することで自らの力量を高める。

- (3) 広報活動と地域連携の充実

- ア ホームページを適時更新するなどできるだけ多くの情報発信に努めると共に中学校訪問を継続し広報活動を活発にする。

- イ 地域連携を推進し地域から愛される学校をめざす。

* 学校教育自己診断（保護者）「港高校の HP をよく閲覧する」（H27:29.8%）を 3 年間で 50%とする。

4 校内学習環境の改善と美化清掃の徹底

- (1) 学習環境の維持・向上に努めると共に環境改善のための予算確保に努力する。

- (2) 緑化の推進や各室、倉庫等の整理整頓に努めると共に校内清掃を徹底し気持ち良い学習環境の維持に努める。

* 学校教育自己診断（保護者・生徒）「清掃活動はきちんと行われている」（H27：74.1%、67.4%）を 3 年間で 80%とする。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 28 年 11 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>有効回答率：生徒 95%、保護者 61%、教員 70%</p> <p>【学力の育成】 これまでの取組により、6月の授業観察デイ、11月の各教科研究授業（成果発表会）・研究協議、1月の授業研究報告会、3月まとめ・職員研修という流れが定着し、パッケージ研修Ⅱを併用しながら、主体的・協働的な学びを進めるための授業改善に継続的に取組んだ。「授業で自分の考えをまとめたり発表する機会がある」については、昨年とほぼ同様の 53%となったが、分からないと回答した生徒がどの学年でも 11%以上あり、授業者により違いがあるためだと推察できる、全体的な割合を高めていくことが課題である。また、効率よく授業を進めるために ICT を活用している（今年度新規項目）は、64%となっており、授業展開の工夫と共に活用率を高めていきたい。 「授業が分かりやすい」では、肯定的な意見と否定的な意見が拮抗している。一方、保護者の「子どもは授業が分かりやすく楽しいと言っている」では、肯定的回答より否定的回答が 10P 程度上回わり 50.6%となっている。それに比べて教員の「生徒の学習意欲に応じて、学習指導の方法や内容について工夫している」は 82%となっており、教員が思っているほどその努力は生徒や保護者に伝わっていない。このことは、授業アンケートにおける各教科への授業満足度に関しても同じことが言える。分かりやすいという評価は授業満足度と相関があり、自由記述においても教員間の違いを指摘する声が多い。学力の幅が非常に広い生徒の現状において、総ての教員が個々の生徒にしっかりと向き合いながら生徒がよく分かる授業を展開するための取組みが一層求められる。</p> <p>【自己実現支援】 今年度も遅刻者数の減少と服装・頭髪・装飾品等の指導強化に取り組んだ結果、遅刻は生徒数の増に伴い若干増加したが、ほぼ横ばいとなっている。特に3年生の10月以降の遅刻が増加しており学習評価を含めた指導の抜本的改革が求められる。 学校の規則やルールを守っていると答えた生徒は、一昨年度 48.1%、昨年度 56.3%、今年度 59%と僅かずつだが向上している。「学校の生徒指導に納得できる」と回答した保護者の割合も、昨年度の 66.8%から 80.5%と大きく向上している。また、否定的な回答も 22.7%から 13.3%へと減少しており保護者の生徒指導に関する肯定感が強くなっている。自由記述では、教員間の指導の温度差を指摘する声もあり、部活動、あいさつ運動、服装や身だしなみの指導強化に期待する声が多い。一方3割強の生徒が学校の規則やルールを守っていないと回答しており、引続きルール・マナー遵守と規範意識の涵養に全教職員が一致団結して取り組んで行く必要がある。 「学校へ行くのが楽しい」、「学校で充実した高校生活を送っている」は、昨年度を若干上回り、其々67%、70%となっている。また、これまで非常に低かった「港高校生であることに誇りを持っている」については、昨年度から9P 向上し 49%（分からない 12%）となり、初めて否定的回答を上回った。 生徒の肯定的回答が 75%を超えているのは、「体育祭、文化祭等学校行事は楽しく行えるように工夫されている」のみであり、難しい課題ではあるが、生徒の自己有用感を高め、行事だけでなく学校に愛着を持つ生徒を育成するための企画や教育の取り組みについての検討工夫が更に求められる。</p> <p>【学校運営について】 学校運営に教職員の意見が反映されていると感じている教員は3分の1程度であり、服務や規律についての厳しさは維持しつつも教職員が自身の意見や考えを自由に述べるができるような雰囲気や体制づくり、風通しの良い職場環境の形成に引続き努める必要がある。 広報活動等については概ね好評であり、更に HP の充実やメール配信システムの維持向上に努めて行くことが重要である。</p>	<p>【第1回】5月28日（土）</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の学力、生活習慣、学校運営の課題は、高校の「入口」、「中」、「出口」という視点で考えてみるとよい。「中身」が「入口」を決め、「出口」が「入口」を決める。 大阪市の中学校では数校でタブレットや電子黒板が導入されインフラの整備が今後全校に拡大していく。そのような教育を受けた生徒に高校でどのような授業を行っていくかが課題。学習の方向性は、入ってくる生徒がどのような活動を経験しているのかを調査し、考えて指導してほしい。 40～50代の教員がタブレットを活用できるようにしていかないといけない。中学校では採用10年未満の教員が55%もいるが、彼等は吸収力が高く教員間の研修は効果が大きい。港高校でも効果を発揮するだろう。 ALをめざすなら、小学校の授業を参考にするのが良いだろう。 地域連携については、全府一区となった高等学校ではあるが、地域貢献への在り方を工夫していくことが必要だと思う。 保育園では敬老会のイベント等で連携している。 中学では地域の運動会の会場となり、自然と交流が生まれている。 中学への出前授業、職場体験、地域清掃等への積極的な参加が必要。 地域の評価が上がれば入学志願者は更に増加するはず。 港高校は、受験したい子が多く層が厚い。希望する生徒はきっかけがあれば、大きく伸びる可能性を持った子が多い。子どもたちの「やる気」を引き出すことが大事 様々な取組みで頑張っている（貢献している）姿を地域の人にアピールすることも必要 図書館法の改定により大阪市では図書館から専門司書の派遣が行われている。小学の様に朝読は難しくても、図書館の充実、読書習慣をつけさせることも必要 <p>【第2回】10月29日（土）</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業を拝見し、昨年よりも生徒が落ち着いているように感じた。また、プロジェクターの配備により活用されている先生方も増えた様に思うので、更に推進してほしい。 中学校でも、生徒の7～8割がスマートフォンを持っており、スマートフォンによるLINEなどSNSでのトラブルが多発している。スマホ世代の生徒へ、新しい時代のモラルを指導する必要性がある様に思う。 服装、身だしなみ等生徒指導については、全教員の一致団結が必要である。 <p>【第3回】2月18日（土）</p> <ul style="list-style-type: none"> 観点別評価について教員間に認識の差がある。中学校ではこの2～3年で評価の方法を変えている。テストの点＝学力ではないので、学力とは何か？を見つめ直す必要がある。 動いて行う授業がALではなく、生徒の脳を動かすような授業を行う必要がある。言語のアクティブだけが先行してしまっている傾向がある。 トイレの清潔さによって学校の指導がわかる。（大阪府のトイレは汚い所が多い）教員と一緒に清掃を行うことが望ましい。努力してできることなので、ここに教員の力が結集できれば、生徒の学力向上にもつながるのではないかと。 家庭で指導できていない部分も多い。学校だけに任せるのではなく、家庭での指導や連携が大切。 中学校では、「ジュニア防災リーダー」育成の取組みが行われている。区役所・消防が、ロープの結び方・消火器の使用方法・簡易担架の作り方などを指導してくれ、中学生をリーダーにして、災害時に自分の命だけでなく、周りの人の命も守ろうという取組である。高校でも取り入れてはどうか？ 学校のアピール度については、非常に良い。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 確 か な 学 力 の 育 成	<p>(1)「学ぶ楽しさ、わかる喜び」を実感させる授業改善（主体的・協働的な学び）の推進と教員の資質向上</p> <p>ア 授業力向上PTを中心に、公開授業や研究授業、授業アンケートを活用した授業改善に組織的に取り組む。</p> <p>イ ICTを活用した授業改善やALについて研究をすすめる。</p> <p>エ 教科会議を充実し、各教科で3年間を見通した指導内容や指導方法、評価の見直しを図る。</p> <p>(2)国語力、英語力の向上とともにプレゼンテーション能力を育成する。</p> <p>ア 英語検定、漢字検定、その他の資格検定の広報を充実し受験者の増加及び合格率の向上に取り組む。</p> <p>イ 生徒の主体的・協働的な学びを通して発表の機会を多くするなど、全ての授業で言語活動を重視した取組みを推進する。</p>	<p>(1)ア、イ ALについての教員研修を5月に実施、以降、他校への授業見学や研修参加等により研究を進め、ICT活用、主体的・協働的な学びの要素を取り入れた授業改善に取り組む。6月に授業観察デイ、11月に各教科での研究授業、1月には、その成果・課題の発表会を教員研修として実施する。教員個々については、授業アンケート後の振り返りシートの提出を必須とし、それを活用した授業改善の取組みを推進する。</p> <p>エ ①H27の課題を踏まえ、教科の目標を明確にし、生徒の実態に適合したシラバスや指導方法、評価方法を教科会議で協議し1月の成果発表時に進捗状況として報告する。 ②研究授業の実施が同じ教員に、また担当任せにならないように教科会議において年度当初に役割分担やスケジュール等を明確にする。</p> <p>(2) ア 受検への挑戦や結果を評価へ反映させるなどインセンティブ制度の導入を検討する。（英語科、国語科を中心に取り組む。） イ (1)のア、イと同様</p>	<p>(1)ア、イ、エ 学校教育自己診断（教員） ①「教育計画の作成に当たって教職員で話し合っている」 ②「教育活動全般にわたる評価を行い次年度の計画に活かしている」 ③「授業方法等について検討する機会を積極的にもっている」（H27：60.3、69.0、74.1）を ⇒ 85%に （生徒）「授業は分かりやすい」（H27：46.7 ⇒ 60%） ・振り返りシート提出率（H27：100% ⇒ 100%） 授業アンケート教員平均（H27：2.86 ⇒ 3.0）</p> <p>(2) ア 検討進捗状況 イ 学校教育自己診断（生徒）「授業で自分の考えをまとめたり発表する機会がある」（H27：55.7 ⇒ 65%）</p>	<p>(1)計画通り実施できた。特に各教科での研究授業では、主体的・共同的な学びの要素を取り入れた工夫や実践が多く見られた。・・・◎（教員）①82%、②51%、③59% ①の22P向上に対して③が15P以上低下している。研修や協議の場は増えたが、それ以外の取組に教員間の差が大きく全体的に引き上げることが課題。一方、生徒の意欲や状況に応じて、学習内容を工夫しているが82%、効率よく授業を進めるためにICTを活用しているは、64%となっている。 ②は、年度途中で分からないが11Pとなった。 （生徒）1年39%、2年46%、3年51%と学年進行で上昇しているものの全体では45%となっており、学力差の大きい生徒集団にあって更なる工夫と取組みが求められる。 振り返りシート提出率 100% ○ 授業アンケート 教員平均 2.95 ○ (2) ア 検討中：コア会議において継続課題とするとともに次年度から順次実施予定・・・○ イ 53%となったが、分からないが11%あるのは、授業者で違いがあるためだと考えられ、全体的な割合を高めていくことが課題・・・・・・・・△</p>

<p>2 豊かな自己実現の支援・夢や目標を持った生徒の育成</p>	<p>(2)進路指導の充実を図る。 ア クラス編成を工夫すると共に進学希望者に対する講習会を計画的、継続的に実施するシステムを確立し、目標の大学や専門学校への進学決定率を高める。 イ 就職希望者に対しては、面接指導と共にマナー・服装・態度・言葉遣いについての指導を強化し希望先への内定率100%をめざす。</p> <p>(3)ルール・マナー遵守と規範意識の涵養。「厳しさと優しさ」を基本理念に全教職員が一致して生徒指導に取り組む。 ア あいさつ運動に教職員全員で取り組む。 イ 服装・頭髪・装飾品等の指導強化に取り組む。 ウ 遅刻者数の減少に取り組む。 エ 全教員が一致して生徒に守らせるべき最低限のルールを徹底し、組織的・統一的な指導を行う</p> <p>(4)生徒の自主活動の育成・活性化 ア 様々な機会を通じて部活動の魅力や意義を伝え部活動加入者を増加させる。 イ 部活動だけでなく生徒を学校に定着(朝・放課後に活動)させる取組みを企画し集団や学校への帰属意識を高める。 ウ 3年間を見通した学校行事の在り方を検討し、平成30年度までに行事計画を再構築する。 エ 生徒自治会を中心として生徒のリーダー育成に取り組む</p>	<p>(2)(3)、(4)とも連動し現行の指定校推薦の基準を見直す。 ア 進学希望生徒に対して目標の大学等に進学できるよう土曜日を活用した講習会を実施すると共に教育産業のFシステムを導入、活用することでの確かな進路指導を行い生徒の自己実現を支援する。 イ 3年生の4月当初から就職者セミナーを企画し、夏季休業中に管理職面接を実施するなどこれまでの指導を早い段階から行う。</p> <p>(3) ア 全教職員が名札を着用し、挨拶運動に取り組む。(教職員が率先して笑顔で挨拶を行うことで来校者に対して生徒が自然に挨拶できる環境を醸成する) ・各学期に2回以上の強化週間を設ける イ 化粧や装飾品についての指導にバラつきが出ないように全教職員が一致協力して生徒指導に当たる。 集会の場で生徒の理解を促すための話を適宜行うと共に自治会活動としての取組みを検討する。 ウ これまでの指導を継続すると共に遅刻の大半が常習者であり家庭連携も困難なことから個々の生徒に着目した新たな指導方法を企画検討する。 エ 授業の場が最大の生徒指導であるという全教員の自覚の下、其々の授業で生徒にしっかりと向き合い机間巡視での声掛けを頻繁に実施し、一方的な講義でなく発問等を多用し双方向性の授業を行うことで生徒の心に火をつける(やる気を引き出す)。また、指導に従わない場合は、放置せず教科担当者と担任、副担任が連携して粘り強く指導に当たる。</p> <p>(4) ア クラブ体験期間の実施、部活加入者のインセンティブ制度の検討 イ 読書活動を推進するための企画検討・実施(朝読、ビブリオバトル、PTAと連携した推薦図書紹介等) ウ コア会議で議論、課題について自治会生徒にも検討させ運営委員会にて今年度中に概要案を作成する。 エ 昨年度5回実施したリーダー研修を引続き実施する。また、ルールやマナー(挨拶・服装・携帯電話・SNS・EV使用・食堂使用等)について生徒自治会があり方を考え創設したルールを先導して生徒に呼びかけ運動として実践していくような体制を整える。</p>	<p>(2) ア 講習実施の有・無、実施率、Fシステム導入の有無、活用度(ソフトインストールPC10台の使用頻度、資料アウトプット回数等) イ セミナー企画実施の有・無 回数(H27説明会は6回、面接指導は7回)</p> <p>(3) ア 学校協議会での意見、外部(来校者)評価 イ 学校教育自己診断(生徒)「先生は協力して生徒指導に当たっている」(H27:53.7⇒65%) ウ 遅刻者数 H27(6300)比 20%減 エ 授業アンケート評価 項目3(H27:3.0)のUP</p> <p>(4) ア インセンティブ制度検討の有・無 部活動加入率 (H27:55⇒60%) イ 企画実施の有・無 ウ 計画の進捗状況 エ リーダー研修実施回数(H27:5回) 生徒自治会企画・発案数(H27:1)</p>	<p>(2) ア 土曜日活用の講習会実施には至らず平日の放課後に希望者対象に開講。Fシステムは導入したが、学力生活実態調査以外の外部模試受験データが不足するため十分な活用ができなかった。・・・△ イ セミナー6回、面接指導8回とほぼ計画通り実施。就職内定率は100%となった。・・・○</p> <p>(3) ア 挨拶運動は計画通り実施、行事等での名札着用は100%であるが、普段は70%程度に留まり行事と同様にすることが課題・・・・・・・・・・・○ イ 生徒アンケートは45%となっており、教員間の指導の温度差を指摘する声がある。また、学校協議会委員からも教員の指導の一致団結が必要との提言を頂いており次年度への継続課題である・・・・・・・・・・・△ ウ 1クラス増の影響もあるが、昨年同期600の増となった・△ 早朝登校指導の効果は短期的であり、他の指導方法を構築する必要がある。 エ H28:3.0・・・・・・・・・・・△ 教員其々の自覚を高め共通理解と共通指導を継続して粘り強く行う組織体制の強化が課題</p> <p>(4) ア クラブ体験期間は実施。インセンティブ制度の検討は、コア会議での検討事項としたが具体的検討には至らず次年度への継続課題。男子の加入率は65%を上回るが女子の加入率が低く全体では58%となっている。・・・○ イ 図書委員活動による図書館だよりの発行や推薦図書照会を行ったが、その他の新企画は実施できなかった。・・・・・・・・・・・○ ウ 教頭が中心となり、概要案を完成。現在、継続検討中であり、次年度中に完成させる・・・・・・・・・・・○ エ リーダー研修6回実施・・・・・・・・・・・○ 新たに自治会生徒との懇談を2回実施。次年度に向けて実施の体制を構築中である。</p>
---------------------------------------	--	--	---	---

<p style="text-align: center;">3 学校運営体制の強化・改善</p>	<p>(1)「コア会議」(校長、教頭、首席、指導教諭、学年主任)が発案し、運営委員会が企画検討の中心となって学校経営戦略の具体化を推進する。 ア 学年が担任だけでなく副担任を含めた組織として機能するように、また各分掌が学校経営計画に則り学校教育自己診断の意見も参考としながらリーダーシップを発揮できるように組織体制を強化・改善する。 イ 学年の独自性は尊重しながらも継続性・連続性のある3ヶ年計画を作成する。 ウ 会議での情報発信を多くし議論の場を創設することにより教員一人ひとりが学校経営に参画しているという自覚を高める。</p> <p>(2)教員力向上 ア 研修等の機会を充実すると共に中堅・ベテラン教員が初任者及び若手教員の育成を担当することで自らの力量を高める。</p> <p>(3)広報活動と地域連携の充実 ア ホームページを適時更新するなどできるだけ多くの情報発信に努めると共に中学校訪問を継続し広報活動を活発にする。 イ 地域連携を推進し地域から愛される学校をめざす。</p>	<p>(1) ア 学校教育自己診断の結果と共に自由記述の内容を全教員に配付し教員一人ひとりが課題や要望をしっかりと把握すると共に個人レベル、教科レベル、学年、分掌でどのように対応していくかを明確に自己申告票は勿論、教科、学年、分掌の年度当初の目標設定に組み入れ実働していく。組織・業務のあり方を精査すると共に少なくとも2週間に1度の学年会・教科会議を開催する。 イ コア会議で引き続き検討し、69期、70期、71期がプロトモデルとなるように検討、年次修正を加えつつ次期に引き継ぎ平成30年には完成させる。 ウ 学年会や分掌会議で各主任が運営委員会での必要な情報を伝えると共に学年や分掌上の懸案や課題について全教職員が共有すると共に意見交換できる場を創設し共通理解を図る。(時間的制約から紙ベースでの報告に終わっている学年・分掌・教科の総括や年度当初目標設定等について意見交換する時間を設ける)</p> <p>(2) ア 初任者研修は、H27と同様に毎週実施する。10年目研修対象者(3名)を核にし、教育センターでの研修成果がOJTで活かされるように調整する。</p> <p>(3) ア 校長室からのメッセージを利用し、本校に勤務する教職員から生徒や保護者へのメッセージを発信する。 イ 挨拶運動、校内外美化活動の継続実施、港区役所、波除町会、波除小学校、地元中学校との連携した企画を実施する。</p>	<p>(1) ア 学年会実施回数(頻度) 教科会議実施回数(頻度) (H27 学年会:3回→毎職員会議後、教科会議:教科で違い→1/2W定例に) 学校教育自己診断(教員) 「各分掌や学年間の連携が円滑に行われ有機的に機能している」(H27:46.6⇒60%) イ 学校行事、人権教育についての検討進捗状況(案の完成) ウ 学校教育自己診断(教員) 「学校運営に教職員の意見が反映されている」 (H27:48.3⇒60.0%)</p> <p>(2) ア 研修実施回数(H27:16回) 10年目研修対象者の活用度(職員会議での伝達報告回数)</p> <p>(3) ア メッセージ発信率(全教職員の50%) イ 実施企画数(H27:2回)</p>	<p>(1) 隔週木曜日の教科会議は定着、それ以外に臨時に開催する教科も多くなった。・・・○ 担任団としては毎週の会議に加え頻繁な連絡会議の開催、同室での普段のコミュニケーションが密にできているが、副担任を学年団として組織に加え機能化させることが課題・・・△(36%) イ 順調に進んでいる。人権教育については次年度これまでの枠組みを大きく変化させた。・・・○ ウ 31%しか肯定的回答がないが、職員会議をはじめ、様々な機会に学校運営上の意見を求めており、その際発言する教員の割合も同様となっている。自由に意見を言い合える協議の場を多くすることが課題・・・△</p> <p>(2) ア 初任研は昨年同様16回実施、10年目研修の教員は其々の学年で経験年数の少ない教員に対して指導育成に当たり、教育センターでの研修成果をOJTに活かすことができた。只全体の中で伝達・報告を行う機会を持つことができなかった。・・・○△</p> <p>(3) ア 適時更新(2週間に1度)はできたが、活用において着任者、教育実習生、一部教員の紹介に留まり50%には届かなかった。・・・○△ イ 挨拶運動、美化活動は昨年と同様に実施。港区からの要請でみなと祭りやコンサート、パレード等に吹奏楽部が中心に参加、地元保育園、老人ホームに実習や演奏会、中学校には出前授業、小学校には授業見学交流を深めた。 (8企画)・・・◎</p>
---	---	--	---	---